

マチスの色彩分析(3)

Analysis of Colors in Matisse's works (3)

坂井 頼子	Yoriko Sakai	女子美術大学	Joshi University of Art and Design
李 相明	Sangmyung Lee	女子美術大学	Joshi University of Art and Design
近江源太郎	Gentarow Ohmi	女子美術大学	Joshi University of Art and Design

キーワード：マチス 絵画の色彩 基本色
基本色カテゴリー

key words : Matisse, color in painting, elementary color, basic color category

1 はじめに

前報までに引き続いて、アンリ・マチスの作品に用いられている色彩にみられる経年変化の特徴を分析する。

マチスは、「私は色でデッサンする」「私にとって色彩の表現的な側面は純粋に本能的な意味で大事です」などと色彩への強いこだわりを語っている。そして批評家たちも「色彩の画家」「フォルムから色彩の解放」「生涯にわたって、色彩への関心を一刻も失うことはなかった」などとマチスにおける色彩の比重の大きさを指摘している。前2報では、彼の油絵に用いられている色彩を経年的に測色した結果から、生涯にわたって多少の曲折はあるものの、かなり単純な一定方向への変化の存在を指摘した。高彩度化と、NCSを念頭においての基本色への収斂などである。

前報ではとりあげた作品の数が少なかったため、本報では作品数を増やして変遷の特徴を確認する。また、前報では生涯を6期に分けて分析したが、本報ではそのうち第1期と第2期とにあたる初期の変化をとりあげた。

2 方法

画集に収録されているマチスの油画の色を測色した。

(1) 対象作品 Elderfield.J(編) : Henri Matisse, *Thames and Hudson* (1992) を対象とした。同書では生涯を7期に分けているが、ここでは第1期(1869~1905)、第2期(1905~1907)、第3期(1908~1913)をとりあげた。対象作品数はそれぞれ、15点、41点、45点の計101点である。いずれも、1頁以上の大きさで収録されている油画である。

(2) 測色 前報において、諸画集における色再現の一致度はごく一部を除いてかなり高いことが

確認された。また、使用色の時系列変化がかなり大きいことも知られた。そこで、使用色をPCCSの12色相各10トーンの有彩色120色、無彩色9色の計129色に分類した。分析の対象は、用いられる色の種類のみであり、面積や配置関係はとりあげていない。

3 結果と考察

ここでとりあげた期間は、44歳までの激変の時代である。美術に志しモローに学び、印象派に感動し、サロン・ドートンヌの第1回展に参加し、新印象派の技法を試み、「フォーヴ」と呼ばれ、やがてニューヨーク、モスクワ、ベルリンなどで個展を開催、など。

3-1 トーンからみた変遷の特徴

この時期における使用色の変化はトーンにおいて特徴的である。vivid・bright・deepなどの高彩度色が期を追って増加し、pale・light grayish・grayishなどの低彩度色が減少する(図1)。1期~3期という前半期において既に高彩度化が顕著に認められるわけである。ただ、この傾向は集中から多様化への過程とみることもできる。1期では使用色がpale・light grayishなどに集中し、vivid・bright・deepなどのトーンは少ない。しかし、3期では全てのトーンがかなり均等に用いられている。

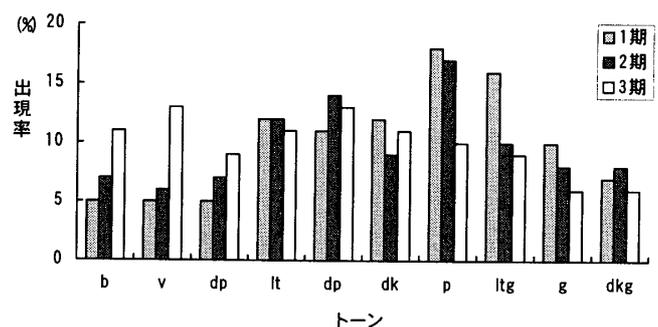


図1 トーン別出現率

また、あえて用いられ方を図的と地的とに区分してみると、1期では pale・light grayish など明るい色を地として用いている作品がおおよそ50%を占めている。これに対して第3期に至ると、vivid・bright・deep など高彩度の色が地的に用いられるようになる。

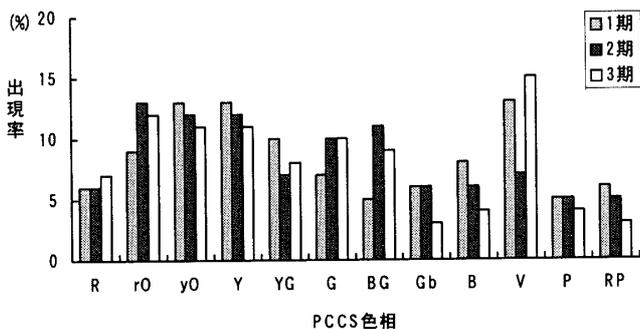


図2 トーン別出現率

3-2 色相からみた変遷の特徴

トーンに比べて、色相という視点でみた場合の特徴は鮮明でない。これは、使用色の分布、1期から3期への変化の両面から指摘できる。使用色は、いずれの期においても全色相にかなり均等に分布している。あえていえば、gB, P, RP, R の出現率は低い。

時系列変化も大きくはないわけであるが、ある程度の規則性を読み取ることはできる。図2には色相ごとに、1期と3期との増減を示した。3期に至って増加する色相は、R・rO, G系, Vの3系統であり、Y系, gB・B系, P系は減少している。また図3には、bright・vivid・deepの高彩度トーンについて、2期と3期との間での増減を示した。両者を比較すると次の点が推測される。高彩度トーンにおけるR, Y, Vの増加は、前報で指摘したマチスの晩期におけるエレメンタリーカラーへの収斂の萌芽とみてよ

いではなかろうか。その場合、BではなくVが増加している点は、マチスのブルーがマンセル系でいえばBではなくPBの範囲に収斂しているところとも一致している。エレメンタリーカラーから考えれば、G系が増加していない点が例外となる。この点については、図2におけるG系の増加と併せて理解すべきではなかろうか。1期2期3期と、G系は増加している。しかしそれは、高彩度トーンではなくdark・dullなど中彩度のトーンが主である。マチスは晩期に至ってもグリーン系では特定の1点への収斂はみられない。ここでとりあげた時期は、G系におけるトーンの模索の時期であるかも知れない。

3-3 無彩色・ピンク・ブラウン

黒は1期2期で3である。ピンクとブラウンとはそれぞれ7%前後で%、3期で4%、白はいずれの期においても1%程度目立った変動はない。

4 まとめ

マチスの油画における使用色について、1913年までを3期に分けて考察した結果から、次の点が指摘できそうである。

(1) この時期には、トーンの変化に特徴がみられ、使用色の種類が高彩度化を始めている。

(2) 色相の変化は少ないが、エレメンタリーカラーのうち赤・黄・青への収斂の萌芽はみられる。

(3) 前報のデータからは、マチスの色彩に基本色カテゴリーが支配する時期が存在するのではないかと見込まれた。しかし、今回とりあげた期間では確認できなかった。灰は殆ど使用されないが、ピンク、ブラウンはある程度の割合で使用されていた。

引用文献

近江他：マチスの色彩分析 (1)、(2) 日本色彩学会誌、26 Supplement 2002

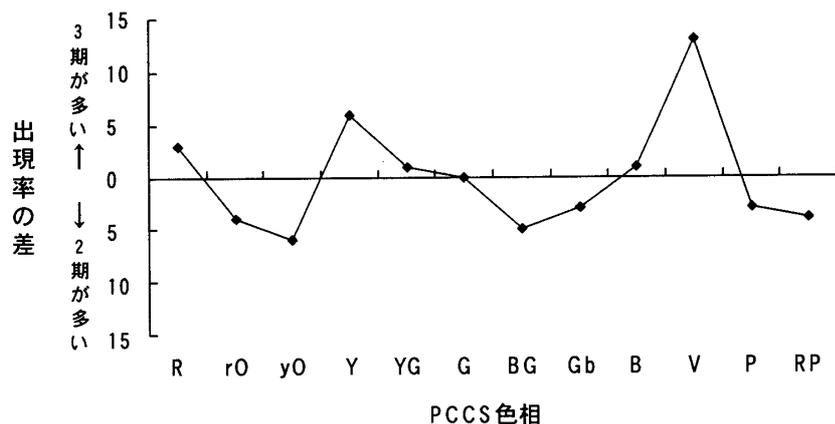


図3 高彩度トーンを増減